

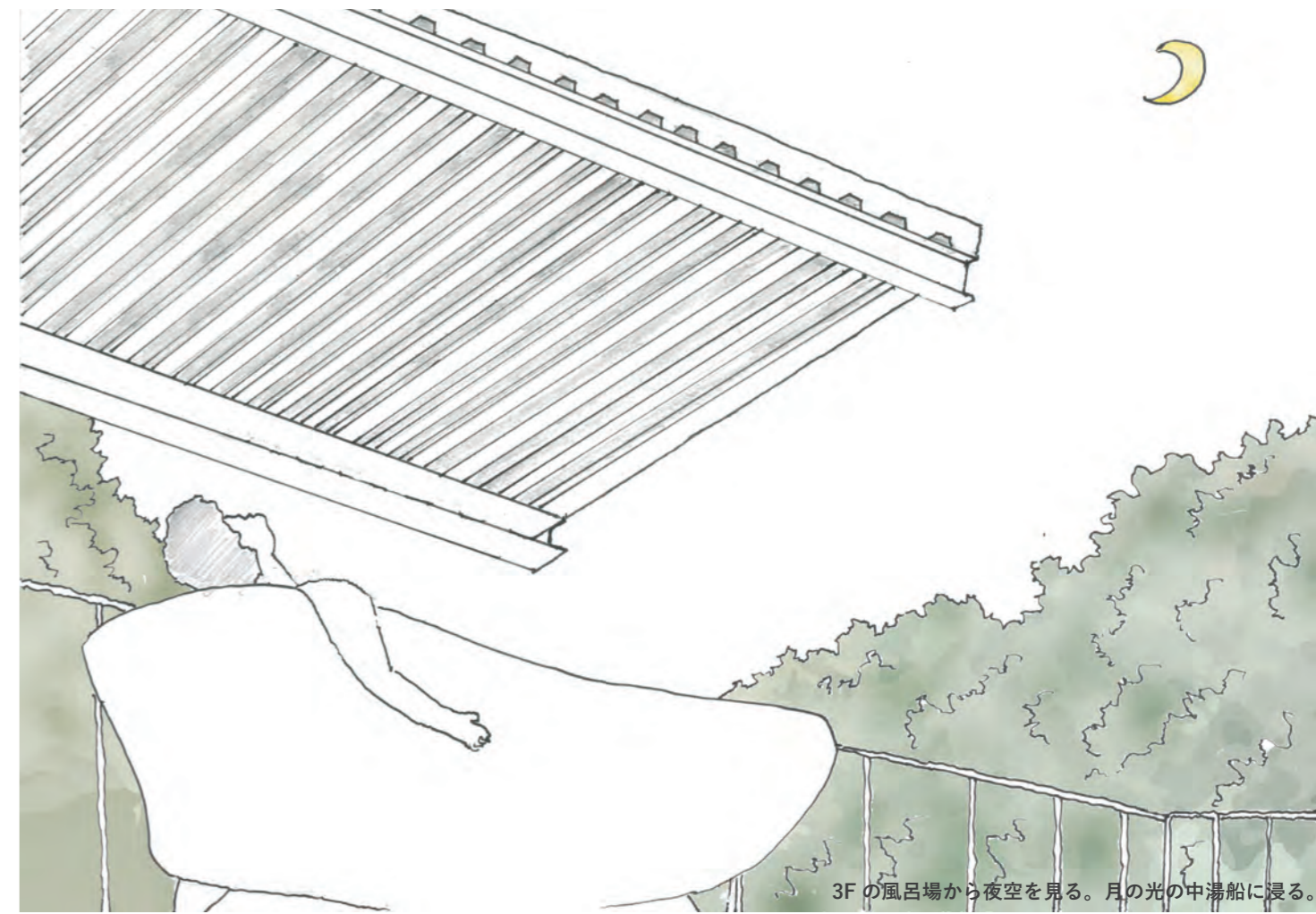
ちょうどいい家 - コンヴィヴィアルなスチームエンジン・エコシステムを内包した家の提案 -

文明批評家のイヴァン・イリイチは、人間と道具の関係において、行き過ぎた道具は人間の主体性を奪うものと主張している。現代の住宅は過度に「快適さ」を求めた結果、複雑で豊かな世界を感じる回路を損なうものとなっていないだろうか。

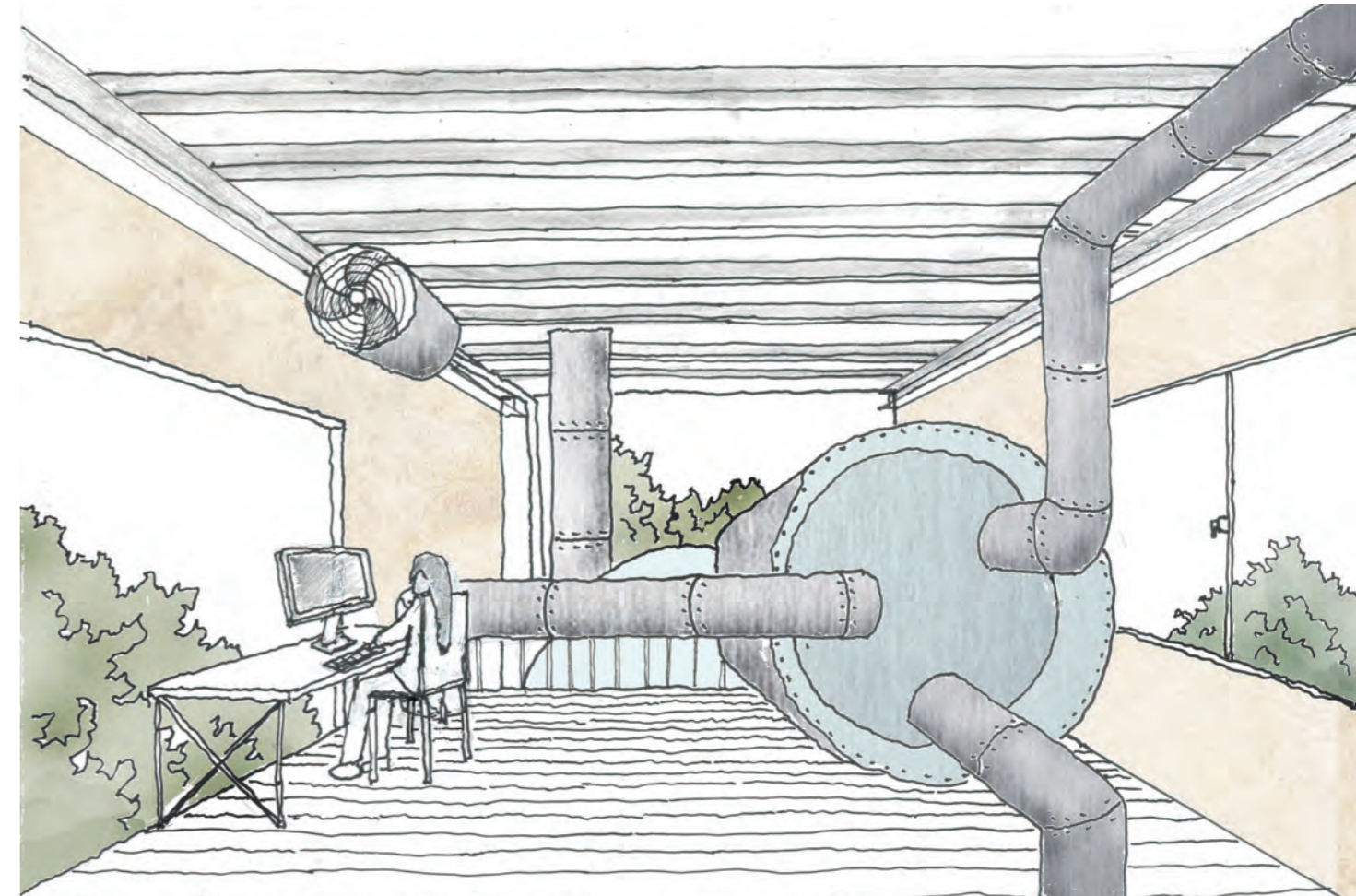
内に閉じこもり過ぎることもなく、また不便な生活を強いられることもない蒸気機関を動力とした”ちょうどいい”家を提案する。



敷地は中山間地域に位置している。山々に囲まれており森林資源は豊富で、前面には一級河川が流れ水資源も豊かな地域である。



3Fの風呂場から夜空を見る。月の光の中津船に渡る。

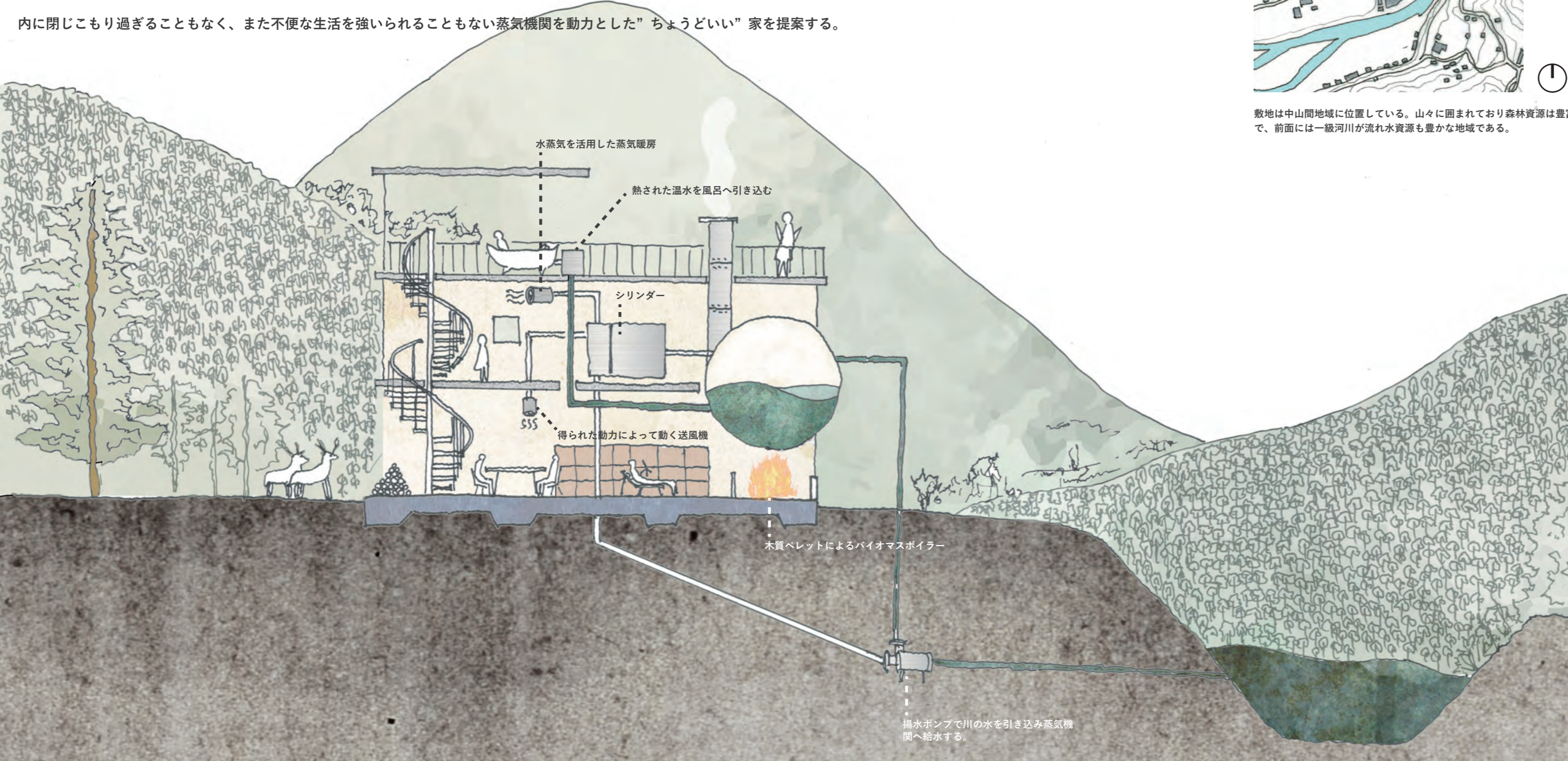


シリンダーのピストン運動で得られた動力によって、各設備を駆動させる。

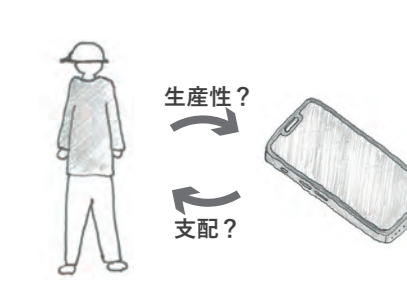


木質ペレットボイラーが暖炉の役割を担い室内を温め照らす。

0259



01-1_ 道具と人間



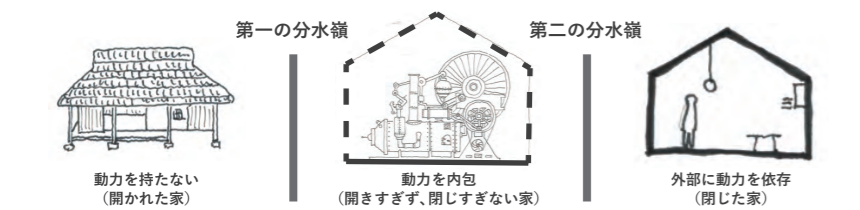
文明批評家のイヴァン・イリイチは、人間と道具の関係において、行き過ぎた道具は人間の主体性を奪うものと主張している。曰く、道具には「二つの分水嶺」があり、「第一の分水嶺を超える際に、道具は生産的なものとなるが、第二の分水嶺を超える際に、それは逆生産的なものとなり、手段から目的自体へと転じる」と述べている。イリイチはエネルギーやインフラ、教育や医療制度などを含めた広い概念として「道具」という言葉を用いているが、現代の住宅を「道具」と考えたとき、この「第二の分水嶺」を超えていないだろうか？

01-2_ 行き過ぎた”快適さ”



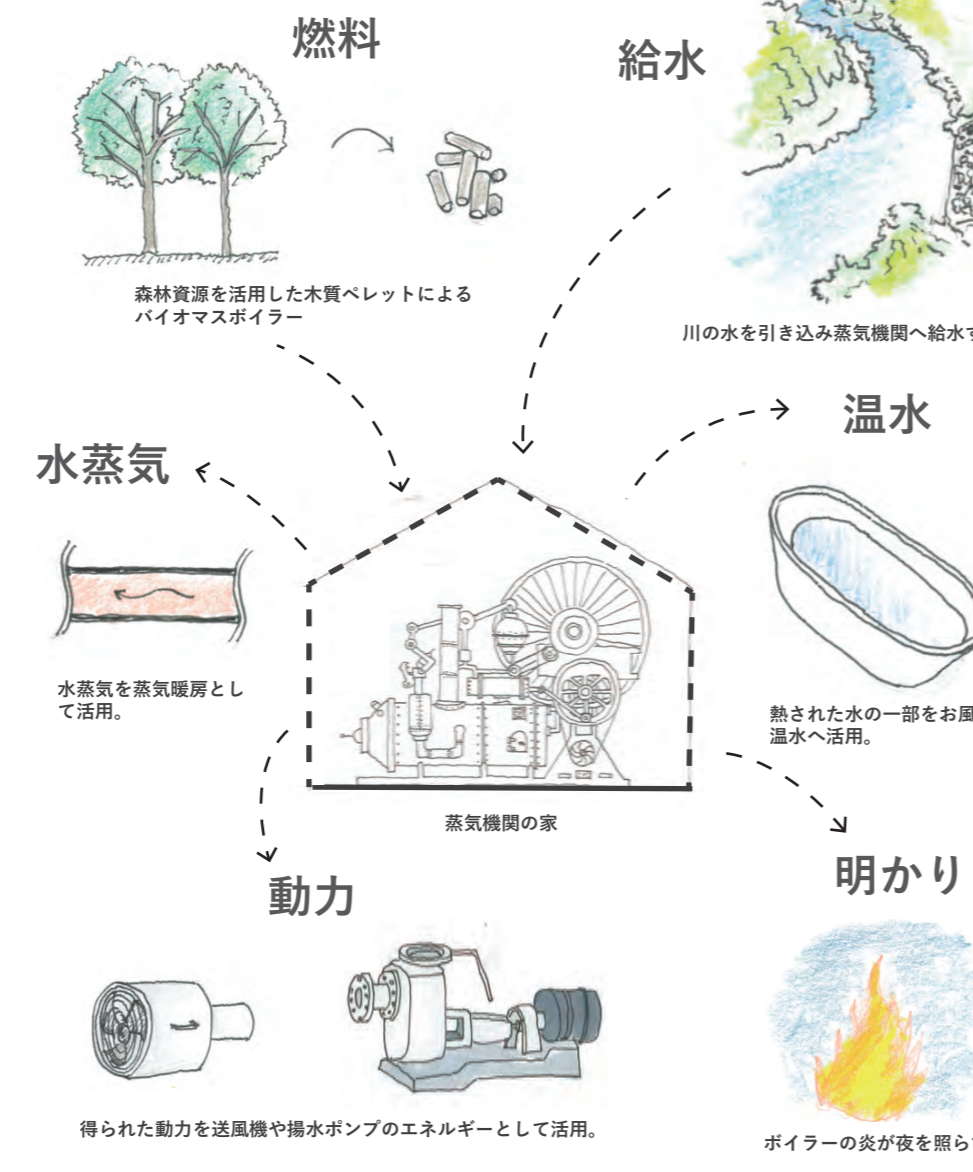
技術イノベーションの例としてしばしば取り上げられる電球は、その発明によって日が沈んだ後も安定した光環境での生活を人々にもたらした。空調設備の登場は、夏は涼しく、冬は暖かい温熱環境を提供し、1年中快適な室内を生み出した。技術の進歩により人々は人工的で快適な室内を手に入れた。一方で、快適さと引き換えに失ったものはなんだろう。快適な温熱環境獲得のため室内を「閉じる」ことによって、虫のさえずりやそこに流れる風が運ぶ音や匂いの変化に気づくことなく、四季の情景に鈍感になっていないだろうか。24時間いつでも明るい環境は、星空の美しさに気づく妨げとなっているのかもしれない。

01-3_ 二つの分水嶺の間 “ちょうどいい家”



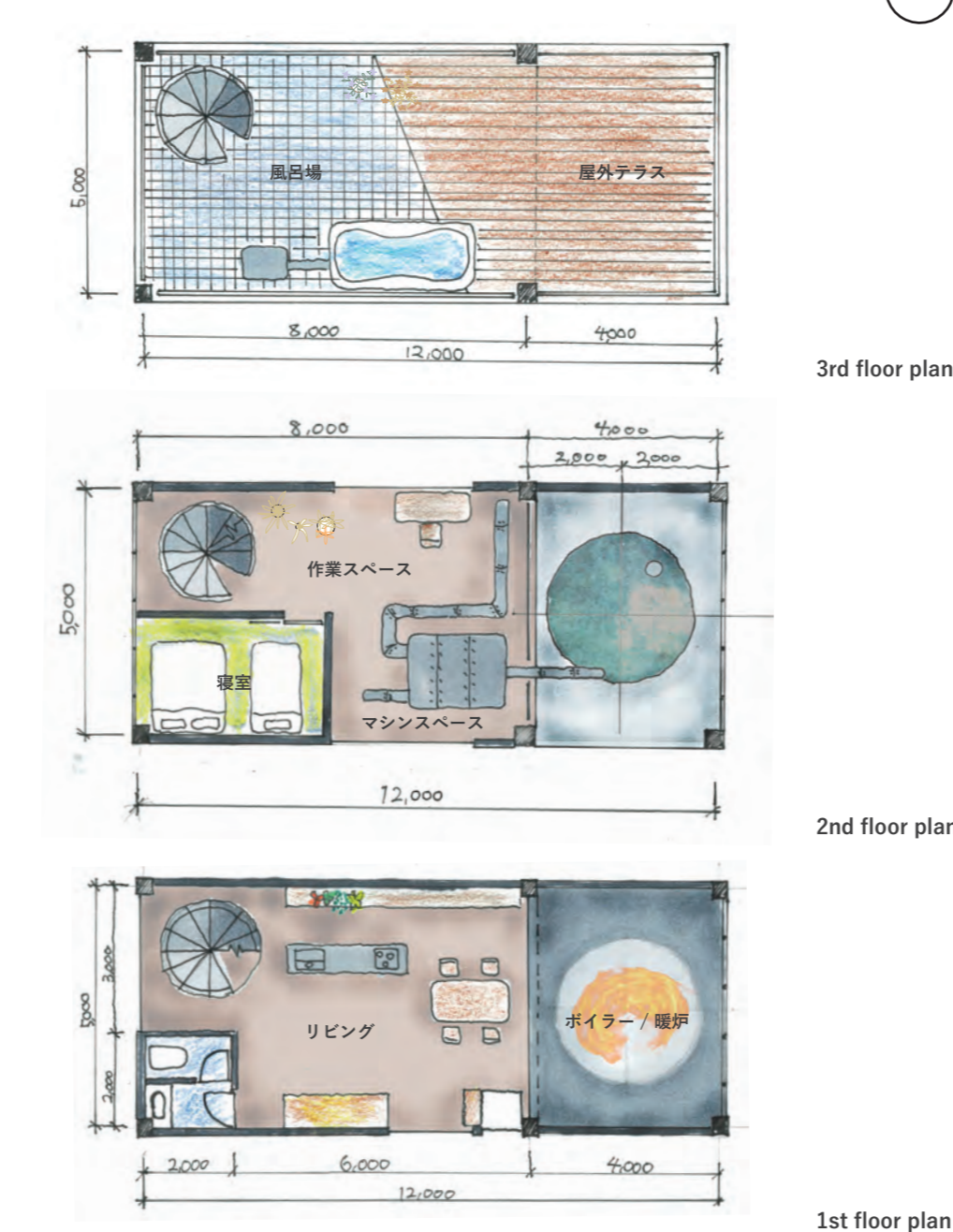
現代の住宅の利便性を牽引している電気を使わない、しかし生活に不便さを感じない家。すなわち第一の分水嶺を超え第二の分水嶺を超えない家として、動力を内包した家、蒸気機関を活用した家を考える。道具と共に暮らす、生きた世界を知覚するオフグリッドな人間の生活の在り方の提案である。

02_ 蒸気機関によるエコシステム 人間と家の自立共生的な関係の構築



18世紀に実用化された蒸気機関を、エコシステムを意識して活用する。水蒸気を発生させるボイラーの原料は森林資源を活用した木質ペレットによるもの。そのボイラーから得られる水蒸気は蒸気暖房に、温水は風呂に活用する。ボイラーの炎の光は適度な明かりを夜に提供してくれる。エネルギーの動きが生活に、身体に浸透する。

03_PLAN



S = 1 / 150